

Gallery  
5-1-3F, Nishi gokencho,  
Shinjuku-ku,  
Tokyo 162-0812  
Tel.03 3268 8700

Office  
Roppongi Hills Residence D-1006  
6-12-4, Roppongi, Minato-ku,  
Tokyo 106-0032  
Tel. 03 5775 3839 / Fax.03 5775 3849

information  
<https://sprout-curation.com>  
[contact@sprout-curation.com](mailto:contact@sprout-curation.com)

## 庭の気がかり

正しいと言う字は地面に落ちている木の棒を五本集めてうまく収まるように作られたのだと思ったが、それなら五という字も正になってないのはおかしいし、正の方が五になっていないのもおかしいと思った。

私と妻と娘は新しい子がやってくるのを庭で待っていたところだった。そろそろ隣の家のむこうに太陽がまわってしまう。そうしたら途端に風の冷たさを思い出してこんなにじっとしてはいられなくなる。朝起きてからずっと庭で過ごしていて、その日の最後の光にあたるガレージ横の細い通路に三人並んで腰掛けていた。妻と向かい合って話していると、一人とってみていても二人、と思う。今、向かい合っている人間がいる、と思うでしょう、けどね、これは人間たちなんだ、って。人間一人につき中の人も一人のはずなのに、実は相手は二人いると思うと脳がグルンと頭蓋骨の中で回るようになるから、私はついつい妻の後ろに落ちている木の棒を数えていたのだ。

フェンスで覆われた空き地に挟まれた道を自転車で通る。朝に2回、夕方に2回。私は娘の保育園の送り迎えをしていた。そのうちこちら一帯は大きな道路になる。前は住宅地だったが、いまはなんでもない場所だった。つまりこの風景は正しい風景だった。主題がなくなって次に来る主題との宙ぶらりんにある、何ものでもない背景となった正しい風景をフェンス越しに写真に撮る。しかしそうするとフェンスの中の植物たちが主題になってしまっ、正しい風景はさらに後退してしまうのだった。

緑色のフェンスの中は植物たちの庭になっていて、自分たちのやり方で生えたり集まったりしていた。ジャケ買いし置きっぱなしになっているジル・クレマンの『動いている庭』の事にきつと違いないと思った。私はその動いている庭の成り行きを日々眺めていた。人は入れないがその代わりというように投げ込まれたゴミが何日も何ヶ月もかけて移動して、形を変えたり色褪せたりする。長いこと様子が変わらなかったのは割れた大きな瓶だ。透明の分厚い湾曲した破片が地面にびったり並んでいて、それは保育園に送る娘を首尾よく自転車に乗せられた朝に、まだ浅い日差しに反射してご褒美に光ってみせてくれたのだ。それは光のウインクだった。ぱちぱちと瓶は私に瞬きをする。

植物はいつまでも伸び続けられるわけではなかった。何ヶ月かに一回は草刈りの役人がやってきてそこいらの草を全部刈ってしまう。私のお気に入りによく立ち止まっては眺めていた肉厚のとがった草、と言うにはもったいないくらいの立派な

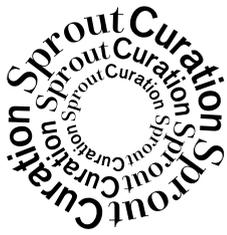
やつもあっさり刈られてしまう。しかし瓶は別だった。役人は草を刈っても、瓶の破片は集めなかった。コンクリートで埋められた地面の隙間から植物が新しい様子を見せてくれるまでは、残された瓶といくつかのゴミの移動を見た。

保育園から帰って食事と風呂をメチャクチャになりながら終わらせた後の寝かしつけに、私はスーザン・ソングの『良心の領界』を娘に読み聞かせていた時期があった。その頃、娘はまだ言葉がわからなかったから「若い読者へのアドバイス」という序文を毎晩朗読していたのだ。そこには庭についての一文があった。庭は自分自身を脱却できる深く入り込める場所であり、そこは過去はもはや重荷ではないという感情を呼び覚ましてくれる場所だと書いてあった。その序文より後ろを読んだことがなかったが、私はその本が好きだった。朗読を終えると、娘が眠りへの無限に長いステップを順調に踏めるように手を取るのだった。娘は寝るのが得意ではなかった。

新しい子が生まれてすぐ後、私は庭の植物を刈った。隣家に枝を伸ばした百日紅も、二階の屋根まで伸びたなんかの木も幹だけ残して地面に落とし鉋で延々と枝を払い、ついでにその他のよく知らないどこからか来た植物らもメリメリと刈っては束ねて捨てた。三日続けると庭はすっきりし私は満足した。それから私たちは庭で長い時間を四人で過ごすための準備を始め、パイナップルやコーヒーをテーブル代わりにエアコンの室外機に並べた。そしてそれらの写真を私は撮った。動いている庭で動いているファンの上で撮られた物は動いていると言ってよく、そこから背景を切り取れば、歴史からも風景からも脱却した正しい静物になるはずだった。

正しい風景と正しい静物という正しい写真を正しい額装に入れることでこそ、壁に掛けられるというものだ。しかしながら私の正しい風景と正しい静物の写真は見てもその正しさが伝わらなかった。庭で娘に靴を履かせながら考えていると、そろそろ紐がある本物の靴が欲しいと言う。まだ娘は紐を結ぶ練習をしていないので靴はガボガボにほどけたままになってしまうだろう。ではいっそのこと全部まとめて結んでしまえばよかろう。正しい風景と正しい静物を組み合わせることで二つが正しく収まるのだったら、それこそがより正しい写真に違いない。私はすっかりポジティブな人間になっていたのっそりその通りにしたのだ。

宇田川直寛



Gallery  
5-1-3F, Nishi gokencho,  
Shinjuku-ku,  
Tokyo 162-0812  
Tel.03 3268 8700

Office  
Roppongi Hills Residence D-1006  
6-12-4, Roppongi, Minato-ku,  
Tokyo 106-0032  
Tel. 03 5775 3839 / Fax.03 5775 3849

information  
<https://sprout-curation.com>  
contact@sprout-curation.com

## 「後ろ歩き問題」「庭にいる物」

後期中平卓馬の写真群は一体何を意味しているのかという疑問は、私にとって遅かれ早かれいつか手をつけることになる祖父母の遺産のようなものだ。素人のような写真とよく評されるが、その写真群を制作した中平の思想の足跡を見つけ出してなぞることがどうしても私にはできない。それらの写真群は私の知らない言葉で組み立てられ、その世界では主題／主体という役割を担うものがそもそも存在しないようである。

中平のことを考えていたのは、風景写真を撮る時に私は何を撮っていることになるのだろうかという疑問があったからだ。私に撮影された風景は、私の生活の一コマか、風景の中にある具体的な対象を見せるものか、曖昧な情景を共有するものか、考察を補助するための説明写真か、などの分類へと収まっていき、ただの風景のままの写真ではいられない。それらは同じように散歩中に撮影された中平の写真とはかけ離れ、主題／主体を充分備えている。ではただの、すなわち純粋な風景とはどういう風景なのだろう。

例えば、公園のベンチで友人と話していると、不意に相手から注意が逸れてしまい背後の景色を眺めている時がある。そういった主題／主体が消えた時に残された背景こそ純粋な風景と言えるのではないか。それはバックグラウンドを持たない、そこにあるだけの純粋な風景なのではないか。そう思い至った時に、風景の中に次々浮かび上がる主題／主体を用意し、それらを消し続けることで、背景から転じる純粋な風景の出現を撮影できると考えた。

庭で過ごす日が増えたせいも、「たとえば、庭は、過去はもはや重荷ではないという感情を呼び覚ましてくれます。」という一文が不意に出てくる。素敵な響きだけれどピンときていないから、ずっと胃の中に残っていて度々口の中に戻ってくるのだ。

庭に出ているついでに静物を撮り始めたが、屋外で撮影された静物は物と同等に背景までしっかり写しとり、それがそこにあった風景とも言えるものにたちまちなってしまう。写真は絵画と違って静物がうまくいかないのだ。

風景から静物を切り離すことができた絵画と、写実的すぎて風景に回収されてしまう写真は静物というポイントではうまく落ち合えないように思える。写真は絵画を終わらせるような存在として、あるいは先へ行くものとして絵画の前に立ちただかった時期が過去にあったのに、絵画はあっさり違う道を見つけて行ってしまった。写真は写実を大事に抱えたまま絵画と会った分岐点でずっと足踏みをしているのだ。

動き回ることができない時の代替手段として、ソナタは自分自身を脱却できる場所により深く入り込んでいくことをアドバイスしてくれていたが、そんな時のための私の庭はもうじき老朽化した家の建て替えで無くなってしまふ。しかし動き回っていたぐらいで過去の重荷から逃れることができているのだろうか？ただそれだけで？もし庭がその代役を果してくれるとすれば、きっとそうなのだろう。

庭もまた動いているからだ。

宇田川直寛